

内交と外交



いりえ・あきら
ハーバード大学歴史学部名誉教授。専攻は国際関係史。アメリカ外交史学会会長、アメリカ歴史学会会長などを務める。2013年国際交流基金賞受賞。主な著作に「日本の外交」「太平洋戦争の起源」「20世紀の戦争と平和」「権力政治を超えて」「グローバルコミュニティ」「歴史を学ぶということ」等。

入江 昭

ハーバード大学名誉教授

現代の世界では内と外との区別が次第に薄れてきている。これからの外交を考えるに当たっては、まずこの認識から出発すべきではなからうか。単純化して言えば、現代の外交は内交とも呼ぶべき現象と密接につながっており、この傾向は近い将来に

最も重要なのは、どの国でも、世界全体でも、多くの民族、人種、宗教などのあいだの移動や接触が過去と比べて飛躍的に増加し、その結果、混合化あるいは雑種化とすら言える現象が一般化されつつある、ということである。これは異人種間と同棲や異民族の雑居によることもあるし、衣食住のような日常生活の多様化にも見ることができる。「純粹」な人種や文化などが仮にかつて存在していたとしても、現代にはもはやあり得ないものである。

そのような状態にあつては、外交そのものの意味も変わらざるを得ない。

は一層顕著となるであろう、ということである。

外交とは、その名の示す通り、特定の国と諸外国との関わり合いを指すが、現代の世界においては「外国」といっても必ずしも「外」の存在を意味するものではなく、「外」と「内」と

い。それはしばしば言われるように、対外政策は国内の世論、経済、政治などの動きに影響されるといっただけではない。「国内」そのものが「国外」と区別がつきにくくなっている状態では、「国益」や「国防」などの概念も変わらざるを得なくなる、ということである。

その最も良い例が人権、環境といったトランスナショナルな問題で、そのような現象にはもともと国境は存在しない。特定の国のみが、例えば男女同権や言論の自由などを尊重するということはもはや不可能である。もちろん世界には人権が侵害されている国はまだまだ存在している。しかしそのような事情は「内政問題」だとして、国際社会との関わり合いを拒むことはできない。そういった国でさえ、外国の情報は頻繁に入ってくるし、国際的なNGO（非政府組織）などによつ

のあいだに厳格な区別がつきにくくなっていく。そして「内」の中には「外」も存在している。要するに今日ではいわゆる「対外」と「国内」との区別は従来と比べて希薄になっているのである。

一つには、グローバル経済が加速すると、ヒト・モノ・カネの国境を越えた動きが著しく、国家を独立した単位として考えることはできなくなっている、ということがある。別個の国々の市場よりは世界全体の動きを捉える必要があり、その場合「外国」という概念は役に立たない。すべての「外国」は、実際には「内国」でもあるわけである。

それに加えて、インターネットなどの普及によって、情報も知識もトランスナショナル、すなわち国境を越えたものとなっている、という流れがある。「iPhone（アイフォン）」「スマー

て国内の人々との接触が途絶えることとはないのである。

環境問題に関しては、もちろん国内の内と外との区別はできない。地球温暖化や希少動植物の保護は、外交問題というよりは全人類、地球そのものの問題であり、すべての人たちが協力して解決しなければならぬ。

私が生涯を通じて関係してきた学術交流には、もとより国境は存在しない。学問や真理の探究は普遍的なもので、内と外の区別は存在し得ない。文化交流による国際理解の増進ということは何の国の外交にとつても非常に重要な課題であるが、交流の結果、すべての国の人々が「混血化」する、すなわち「外」も「内」も同じようなものになってしまうまで、その努力が続けば、「外交」そのものも従来とは一層性格の異なったものとなるであろう。